

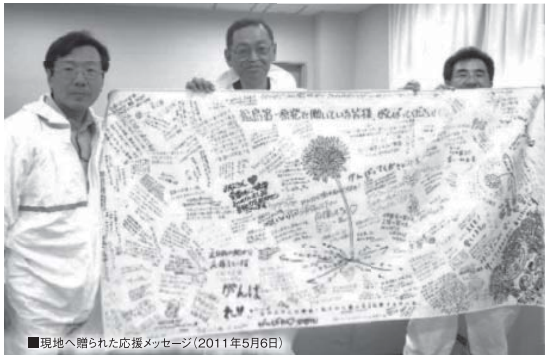
谷川武氏は東京大学在職中から約20年間、福島原子力発電所(以下、福島原発)の非常勤産業医を務めている経緯から、東日本大震災発生後、ストレスケアのため現地に入った最初の専門家であった。

谷川氏が福島原発を訪れたのは、震災から約1ヵ月後。当時はまだ外部の人間は訪れることができない混沌とした状況であった。そのような中、現地との連絡を取り、誰よりも早く産業保健活動を始めた谷川氏が目の当たりにしたのは、原発の所員がさらされている過酷な作業環境であった。

当時、所員の食事はレトルト食品。寝る時は防護服を着たまま雑魚寝。シャワーを浴びる設備もない状況を見た谷川氏は、睡眠不足や慢性疲労の状態での作業を行うことよって起こりうる作業の非効率化とヒューマンエラーによる事故のリスクの高さを重視し、作業環境の早期の改善を東京電力株式会社(以下、東電)に進言。事故処理に追われていた東電に谷川氏の訴えは即座には採用されなかったが、マスコミに所員の現状を公表するなどして、その環境改善の重要性を産業界の立場から訴え続けた。その努力の結果、全国から改善を求める声があがり、その世論に押されるように、東電は作業環境の整備を行った。改善された環境下で所員はシャワーを確保。エアコンの完備された体育館で、2段式ベッドに寝ることができるようになり、食事の面でも生野菜の支給が開始された。

多大なストレス下では、人間は判断を誤りやすくなり、不注意事故も発生しやすくなる。福島原発の場合、小さなヒューマンエラーがさらなる事故につながる可能性もあった。そのような中、会社からの対応が遅れているだけでなく、そのほとんどが、自身も被災者であったにも関わらず、東電社員ということでも加害者の一員と見なされ、世論からも援助を得ることが出来なかつた所員の作業環境改善には谷川氏の訴えが必要不可欠だったと言える。

東日本大震災の影響は福島原発の二次災害も伴い、想像を遙かに超えたものとなった。災害発生時には、まず被災者の支援が非常に重要であると共に、その災害に対処する復旧支援者の存在を忘れてはいけない。今回、谷川氏が訴えた日夜復旧作業を続ける人々の健康管理と福祉の改善は、貴重な教訓として活かしていかなくてはならないものである。福島原発の復旧は、まだ終わつたわけではない。谷川氏は現在も現地を訪れ、活動している。そして、その活動を支えていくことは、東日本大震災を経験した日本国民の使命であると言えるだろう。



谷川武 Takeshi Tanigawa
愛媛大学大学院医学系研究科公衆衛生・健康医学分野 教授
Professor, Department of Public Health, Ehime University Graduate School of Medicine

推薦者
安川正貴 下光輝一
愛媛大学大学院医学系研究科医学系研究科長・医学部長
東京医科大学名誉教授、日本ストレス学会理事長、公益法人健康・体力づくり事業財団理事長

1986年神戸大学医学部卒業、同年東京大学大学院医学系研究科入学(社会医学専攻)。1990年東京大学大学院医学博士、東京大学医学部助手(公衆衛生学)。東京大学在職中から福島第1原子力発電所の非常勤産業界として、その後、福島第2原子力発電所の非常勤産業界として計約20年間勤務している。1995年筑波大学講師、1999年米国ハーバード大学客員講師、筑波大学助教授、准教授を経て、2008年より現職。産業保健、睡眠予防医学、循環器疾患の疫学、職場のストレス対策などを主な専門分野としている。

福島原発の復旧における作業環境の改善に尽力

福島原発の所員にも支援を

医療従事者部門
(国内)
Health Provider